

GIYA

鬼才 ローレンス・ディッキーが挑む 現代スピーカーの究極

VIVID audio (ビビッド・オーディオ)のチーフエンジニア、ローレンス・ディッキーの設計思想は彼の長いキャリアの中で常に一貫しています。その思想とは、スピーカーに発生するあらゆる「共鳴」と「共振」を徹底的に排除すること。

彼はその命題に対して、常に時代の最新のテクノロジーをもって挑み続け、ひとつの到達点として GIYA シリーズを完成させました。

フラッグシップモデル G1 SPIRIT を筆頭に、もっとも小型の最新モデル G4 まで全てのモデルにおいて、共通したテクノロジーを根底に、キャビネットからクロスオーバーネットワーク、ドライバーユニットの設計を含むすべてのエンジニアリングをディッキーが担当し、すべての妥協を排して彼の理想を追求した GIYA シリーズは、現代スピーカーのひとつの究極の姿であることは疑う余地もありません。



GIYA (ギヤ) とは

GIYA (ギヤ) とは、南アフリカに住むズール族のダンスの名前です。宙を軽やかに舞う自由な躍動感溢れるリズムと、草原を渡るたおやかな風の揺らぎをイメージして、ローレンス・ディッキーは自らの最高傑作に GIYA という名を冠しました。遙か遠くの空にわずかに聴こえる鳥のささやきから、大地を震わせるアフリカドラムの強靱なサウンドまで、ナチュラルで透明なワイドレンジサウンドで音楽表現の真髄に迫るスピーカーシステム。それが VIVID Audio の GIYA シリーズです。

History

1993

・ VIVID audio のチーフエンジニアである ローレンス・ディッキーは、英国のスピーカーブランド B & W で自身のスピーカー設計者としてのキャリアをスタート。当時B&W社の社長を務めていたロバート・トゥルンツ氏のもとでエボックメイキングとなるスピーカー「オリジナル・ノーチラス」を完成し脚光を浴びる。(1993年)

1996

・ この頃から、B & W 社の経営方針が変わりはじめ、社長であったトゥルンツ氏が退任し、会社の方針が開発重視から販売重視の方向に転換するのに伴い、ディッキーはB & Wを退社。(1996年)
・ プロ用スピーカーメーカーである Turbo Sound でモニタースピーカーの開発に携わる。
・ 一方で、B & W 社の社長であったトゥルンツ氏は、もともとアフリカの民族音楽に造詣が深かったことから、音楽ビジネスをアフリカで立ち上げることを決意し、南アフリカ共和国に拠点を構えた。
・ 南アフリカ共和国で音楽ビジネスを立ち上げたトゥルンツ氏は、自らのビジネスの他に、手伝いで音響コンサルタント的な仕事も引き受けていたが、その関係で、南アフリカでハイエンドオーディオ製品の輸入ビジネスに携わっていた、フィリップ・グーテンタッグ氏と知り合う。

2001

・ ローレンス・ディッキーは Turbo Sound で開発に携わりながらも、自身の理想とするスピーカーを創りたいという情熱を燃やしていた。ある時、トゥルンツ氏の紹介によりディッキーとグーテンタッグ氏が南アフリカで出会い、二人の情熱が重なり合ったことで VIVID audio が誕生した。(2001年)

2008

・ VIVID Audio 創立から7年。いよいよ、「オリジナル・ノーチラス」を進化させた完成形。GIYA シリーズが完成する。(G1 GIYA)

2010

・ GIYA G2 発表

2011

・ GIYA G3 発表

2014

・ GIYA G4 発表

2016

・ GIYA G1 Spirit 発表

2025

・ GIYA Cu シリーズ発表

Stella Inc.

株式会社 ステラ
173-0026 東京都板橋区中丸町51-10
Tel:03-3958-9333 Fax:03-3958-9322
e-info@stella-inc.com
http://www.stella-inc.com 2025.09 SVIC005

GIYA Cu Series
designed by Laurence Dickie



VIVID audio®

Cu Series

GIYA Cuシリーズ誕生

VIVID Audio (ビビッド・オーディオ) のチーフエンジニア、ローレンス・ディッキーは、共鳴や共振を徹底して排除する数々の技術の結晶としてGIYAシリーズを完成させました。初代GIYA G1の誕生から17年、いまなお他の追随を許さぬ最先端スピーカーとして、その地位を確立しています。その後、フラグシップモデル「GIYA G1 SPIRIT」で培われた新技術は第2世代「GIYA S2シリーズ」に継承され、シリーズ全体の進化を実現しました。

さらに2024年には、ローレンス・ディッキーの理想をすべて具現化した究極のスピーカー「MOYA M1」が完成。その開発で採用された銅キャップは、後のシリーズにとって大きな意味を持つ成果となりました。

そして、S2シリーズの技術を基盤に、低中域にMOYA M1で開発された銅キャップを新たに導入することで誕生したのが、新世代「GIYA Cuシリーズ」です。内部剛性を高める複合材の再設計、金属パーツの導入による制振性能の向上、専用チューニングを施したドライバーやネットワークといった進化を加え、測定性能と音楽表現力を高次元で両立。背景の静けさ、音場の透明感、低域の精密な再現力をさらに磨き上げています。

VIVID Audioの到達点をさらに高みへと昇華させたGIYA Cuシリーズのサウンドを、ぜひお楽しみください。

GIYA Cuシリーズの技術的進化

■ エンクロージャー素材・構造

内部剛性を高めるため、複合材の配合をCuシリーズ専用に再設計
要所に銅を含む金属パーツを導入し、共振を徹底的に抑制
背景の静寂性や低域の精密な再現力を向上

■ ドライバー技術

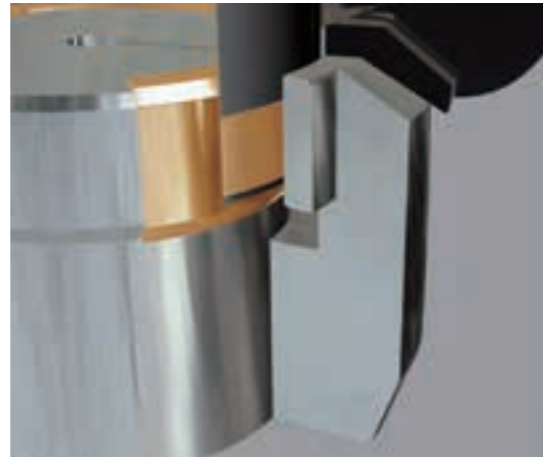
S2で採用されたドライバー設計を継承しつつ、Cu専用にチューニング
低中域にMOYA M1で開発された銅キャップを採用
拡散性を最適化し、音場の広がりや明瞭度を向上
中低域のレスポンスと制動力を強化し、楽器や声のニュアンスを忠実に再現

■ クロスオーバー・ネットワーク

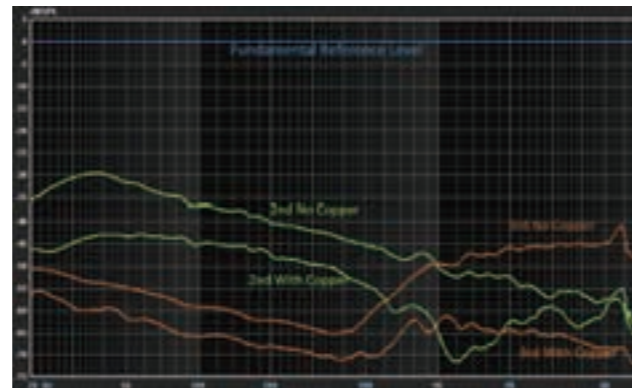
配線や部品選定を見直し、タイムアライメントと位相特性を最適化
微小信号の透明度を向上させ、音像の定位や空間の一体感を強化
従来モデルを超える解像度と立体感を実現

■ 測定性能

S2世代比で歪率の低減、S/N比の向上、周波数特性の平滑化を達成
学的測定と聴感上の表現力を両立
音楽の微細なニュアンスやホールの空気感まで忠実に再現



銅キャップ GIYAシリーズすべての製品の中低域に採用



C125SE VS Cu ディストーション



GIYA G1S Cu
4 Way 5 Drivers
(G1 Spirit)



GIYA G2 Cu
4 Way 5 Drivers



GIYA G3 Cu
4 Way 5 Drivers



GIYA G4 Cu
4 Way 5 Drivers

Technology



ウーファーのキャビネットを構成するアブソーパー・チューブ

GIYAシリーズが纏う特徴的なフォルムは、ウーファーにアブソーパー・チューブを採用していることに由来しています。ドライバーユニットは原理的に、外に放出する音響エネルギーと同じ量のエネルギーをキャビネットの内部にも放出しています。特に低音部を担当しているウーファーともなると莫大なエネルギーをキャビネット内部に放出しており、このエネルギーがスピーカーキャビネットを「共振」させてしまうのです。

アブソーパー・チューブは、チーフエンジニアであるローレンス・ディッキーがB&W社在籍時代に開発した彼オリジナルのアイデアで、キャビネット内部に放出されたエネルギーを効率よく自然に減衰させるための極めて優れた手法ですが、ウーファーのキャビネットにアブソーパー・チューブを採用したのは、GIYAシリーズが完成する以前にはディッキーがB&W社で完成させたオリジナル・ノーチラスのみでした。これはキャビネットをテーパチューブ状に形作ることが大変な困難を伴うために、ディッキーが去った後のB&W社では技術的に実現が不可能になってしまったからに他ありません。

GIYAの技術的な核心部分は、ウーファーにアブソーパー・チューブを採用したこと。またアブソーパー・チューブとバスレフを組み合わせることで、アブソーパー・チューブの効果を落とすことなくチューブの小型化を実現させたところ。このことによりキャビネットの共振が皆無な透明でパワフルなサウンドが得られたのです。

アブソーパー・チューブとバスレフ方式の両立

B&W時代に開発した「オリジナル・ノーチラス」スピーカーは、アブソーパー・チューブを使用した革命的なスピーカー・システムでしたが、致命的とも言える欠点がありました。それは、ウーファーの音圧レベルが他のドライバーユニットに比べて著しく低かったことです。この致命的な欠点のために、オリジナル・ノーチラスは一台のアンプで使用することができず、専用のアクティブクロスオーバーを介してマルチアンプ方式とせざるを得ませんでした。専用アクティブクロスオーバーのウーファー回路にゲインを持たせて、他のドライバーの音圧レベルに揃えたわけ。このことにより、ウーファーのダイナミックレンジに制限が加わってしまったことが更なる欠点としてあげられます。

ディッキーは、ウーファーにアブソーパー・チューブを適用させるにあたり、オリジナル・ノーチラスの欠点を克服する必要がありました。ウーファーの音圧レベルを確保して十分なダイナミックレンジを得ること、しかもアブソーパー・チューブを動作させること。このある意味相反する二つの目標を実現するディッキーのアイデアは、アブソーパー・チューブにバスレフ方式を組み合わせたことでした。このアイデアは当初、なかなかうまく行きませんでした。度重なる実験の結果、アブソーパー・チューブのカットオフ周波数とバスレフポートの共振周波数をうまく設定することにより十分動作することを発見し実用化に成功。GIYAシリーズでは、十分に豊かなエネルギーと、アブソーパー・チューブによる共鳴・共振の無い透明なベースサウンドを見事に両立しています。



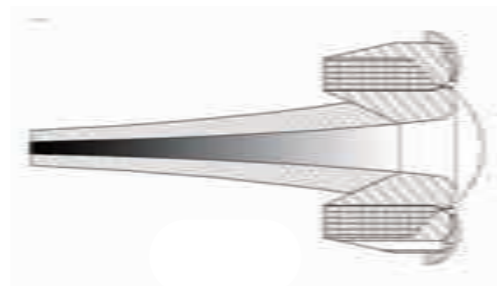
すべてのドライバーユニットはディッキーの設計により完全内製化

GIYAシリーズをはじめとする VIVID audio のすべてのドライバーユニットはディッキー自身が設計し内製化。ドライバーユニットを自社製造しているスピーカーブランドは数あれども、スピーカーシステムをまとめあげるエンジニアが自らドライバーユニットを設計する例は他社にはありません。ディッキーが自らドライバーユニットを設計するということは、システムの完成形を頭に思い浮かべながらドライバーユニットを設計できるということです。システムの特性を完全に把握してそれに合わせてドライバーの設計を微妙にアジャストすることができるのが、VIVID audio のサウンドの完成度の高さの秘密です。

すべてのドライバーユニットに同一素材のダイヤフラムを採用

ディッキーは、ツイーターからウーファーまでのすべてのドライバーユニットに同一の振動板素材を使用することにこだわっています。振動板の素材が異なると、当然素材の持っている物性も異なり、音響的には音速の違いとなって現れます。この音速の違いが、サウンドのクセを生み出してしまうからです。ツイーターからウーファーまですべての帯域で使用できる振動板素材は実はそれほど多くありません。他ブランドでツイーターに使用されているダイヤモンド振動板ではウーファーを作ることには不可能で、ウーファーやミッドベースに使用されるケブラー繊維ではツイーターは作れません。

ディッキーにとって理想の振動板素材はアルミ合金でした。アルミ合金であればウーファーにもツイーターにも使用でき、すべての帯域で素材を揃えることができるのです。同一素材を全帯域で使用することにより、全帯域にわたるサウンドのクセが生じず、あたかも超ワイドレンジなフルレンジスピーカーが鳴っているようなサウンドの一体感を得ることができるのです。



独特のカテナリーカーブを持つドームツイーターD26とミッドレンジ D50Cu

アルミ合金はツイーターやミッドレンジといった高域用のドライバーに使用するには、素材が柔らかく硬度がやや足りないところがウイークポイントとなり、高域特性を伸ばすことが難しいことは事実です。ディッキーはアルミ素材の硬度不足をカバーするために、高域用ドライバーにおいてドーム形状をコンピューターシミュレーションを利用して解析、ドーム断面形状がカテナリーカーブ（懸垂曲線）を描く形状とすることで最大の強度を得ることができることを発見し、D26ツイーターとD50Cuミッドレンジに採用いたしました。この独特のドーム形状により、アルミ振動板では従来あり得なかったほどに高域特性を伸ばすことに成功。

すべてのドライバーユニットにネオジウムを使用した独自のラジアル(放射型)構造磁気回路を採用

ドライバー背面の磁気回路は空気の動きを最大限スムーズにするためにできるだけコンパクトにすることが望ましいですが、十分な磁力を得ようとするとマグネットはどんどん巨大化していき空気の動きにまで気を配ることがなかなかできないのがドライバー設計の現実です。ディッキーはこのジレンマを画期的な磁気回路構造により解決し、磁気回路のコンパクト化と強力な磁力を見事両立しています。

また十分強力な磁束を発生することにより、すべてのドライバーユニットでボイスコイルが磁束ギャップ内に完全に収まるショートボイス方式を採用しており、このことがディストーション特性の向上に大きく役立っています。

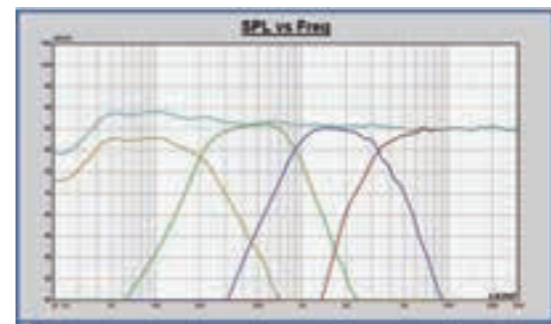


4 way Speakers

すべてのドライバーユニットには十分に広大な周波数帯域をカバーできる能力を持たせる。その上で、周波数帯域の中のごく一部分、本当に良いところのみを使用するために、GIYAシリーズは4ウェイを採用しました。

音楽信号の周波数帯域を 20 Hz ~ 20,000 Hz と考えると、これはおおよそ9オクターブのレンジとなります。ディッキーはこれを4分割することを最適と考えています。ミッドレンジとミッドベースにそれぞれ2オクターブずつ受け持たせ、ツイーターとウーファーにはそれぞれ2.5オクターブずつ割り振ります。GIYAシリーズのクロスオーバー周波数は、G1 から G3 までは共通で 220 / 880 / 3,500 Hz であり、G4 は 250 / 1,000 / 4,000 Hz ですが、すべてのドライバーユニットは、使用帯域よりも遥かに広大な周波数帯域を持っています。クロスオーバー回路はもちろんディッキー自身の

手による設計です。ディッキーはGIYAシリーズの周波数特性を低域から高域までが全くのフラットになるようには設計していません。彼の長年の経験により、高域に向かって若干レベルを下げた設計としていますが、これは、実際の家屋で使用した際にその方が聴感上、よりフラットに聴こえるからです。



GIYA Cu Series Lineup

新世代 GIYA Cu シリーズ

GIYA Cuシリーズは、VIVID Audioの革新的な設計思想を受け継ぎながら、新たな技術と素材を組み合わせ誕生した、次世代のリファレンススピーカーです。S2シリーズで確立されたキャビネット構造、ドライバー設計、ネットワークチューニングの完成度を礎に、Cuシリーズではさらに内部剛性の向上、共振の抑制、制振性能の最適化を追求。Moya M1で開発した銅キャップをすべてのGIYAシリーズの中低域に採用しました。加えて、ドライバーやクロスオーバーネットワークもCu専用に設計・チューニングされており、微細な音楽表現からダイナミックなスケール感まで、幅広く忠実に再現することが可能になっています。

Cuシリーズの各モデルは、設置環境やリスニングスタイルに応じて選択できる4種類で構成されています。高い解像度と豊かなスケール感を両立させ、音楽の細部に宿るニュアンスや空間の奥行き、ホールの空気感までを自然に描き出します。リスナーはどのモデルでも、VIVID Audioが目指す究極の音楽体験を存分に享受することができます。



GIYA G1S - Cu (GI SPIRIT) / G1S-CuEX

新世代 GIYA Cu シリーズのフラグシップモデル

G1 SPIRIT の登場は、G2 の開発で得られた経験と知見をオリジナル G1 に反映させたものでした。その結果、低域再生において多くの設計者が「十分すぎる」と評するほど強力な磁気回路を採用し、音質面で一段と磨きをかけています。そして今、新たな G1 SPIRIT Cu では、フラグシップモデル MOYA M1 で採用された 銅キャップ付き磁気回路 の設計を GIYA シリーズへと展開しています。

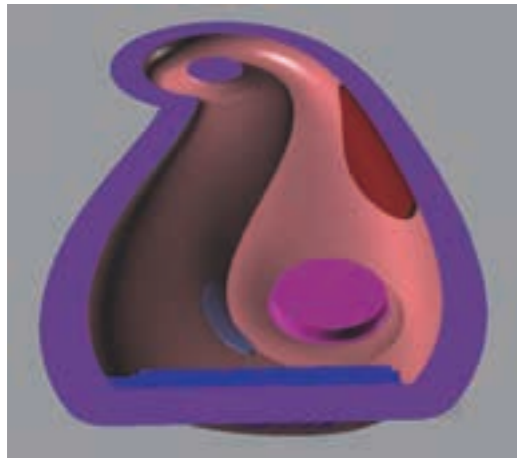
G1 SPIRIT Cu では、放射状磁化方式を採用した 75mm ボイスコイル搭載の C125-75Cu と、集中磁束型の 50mm 放射状磁気回路を備えた D50Cu の双方に銅キャップを追加。これによりインダクタンスを低減し、高域特性を拡張。さらに歪みを大幅に抑制し、その低減幅は状況によっては最大 20dB に達します。



■スペック

ドライバーユニット	D26 S Tweeter D50 Cu Mid-Range C125 - 75SCu Mid-Bass C225 - 100 Woofer x 2
能率	92dB @ 2.83V rms / 1m
インピーダンス	6Ω nominal / 3Ω minimum
周波数帯域	25 - 36,000 Hz @ -6dB
ツイーターブレイクアップ周波数	44,000 Hz
周波数特性	29Hz~33kHz (基準値±2dB)
全高調波歪率 (2次・3次)	<0.3% below 220Hz, <0.1% between 220Hz and 3.5kHz, <0.3% above 3.5kHz
クロスオーバー周波数	220 / 880 / 3,500 Hz
最大許容入力	1,600 W
製品寸法・重量	1,600(H) x 440(W) x 820(D)mm, 67.4kg / 62kg(EXモデル)

Technology



エッジが存在しない3次元曲面で形作られたキャビネット

GIYAシリーズを形作るキャビネットの素材には、航空宇宙産業で使用される軽量かつ極めて強靱な特殊ガラスファイバー強化樹脂を使用しています。軽量のバルサ繊維をコアとし、ガラスファイバー強化樹脂でサンドイッチする独自の三層構造とすることで十分な強度を保ちつつ軽量化を果たしています。

後述する「リアクション・キャンセル・マウント」方式によりウーファーのエネルギーはキャビネットに全く影響を及ぼしません。他ブランドのスピーカーでは、ウーファーのエネルギーに負けないように強固な重量級のキャビネットを必要としますが、この「リアクション・キャンセル・マウント」により、VIVID audio のスピーカーは重いキャビネットを必要としません。これは VIVID audio の大いなるアドバンテージです。このテクノロジーのおかげで、軽量の樹脂成型でのキャビネット製作が可能になりました。加えて、この樹脂成型により、キャビネット形状を3次元的な曲面で構成させることも可能にいたしました。スピーカーシステムの基礎となる音響理論は、昔も今も変わっていません。スピーカーを形作るキャビネットに角やエッジが存在すると、その部分から音響エネルギーが放散され(二次音源)、ドライバーユニットからの一次音源と相互作用を起こし、サウンドに

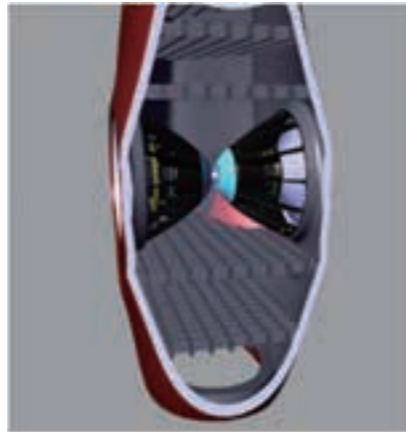
キャラクターを付けたり、サウンドステージを損ねたりすることは昔からよく知られた事実です。3次元曲面のキャビネットは音響的に優れていることは従来から知られていることですが、木材(ウッド)や金属などの従来のキャビネット材料では、実現させることがほぼ不可能なことでした。

GIYAシリーズの類いまれなサウンドステージ再現能力は、まさにこの3次元曲面構成のキャビネットの賜物です。ディッキーは、アブソーパー・チューブとしての動作を完全なものとして、さらにスムーズな音響拡散に最適なキャビネット形状を、最新のコンピューター解析によりシミュレーション。すべての音響特性を満足させる結果としてGIYAシリーズの特徴的なフォルムが完成したのです。

キャビネットにエネルギーを伝えない「リアクション・キャンセル・マウント」

低音部を担当するウーファーは、大きな音響エネルギーを放出させるために莫大な力で駆動されますが、ウーファーが動けば動くだけ反作用力でキャビネットに同じだけの力がかかります。金属製のキャビネットを採用した重量級スピーカーなどは、まさにこのウーファーの反作用力に耐えうるキャビネットを作ろうとした結果ですが、設計者ディッキーは、キャビネットに重量と強度を必要としない画期的な方式を開発しました。

「リアクション・キャンセル・マウント」と名付けられたこの画期的な方式は、二つのウーファードライバーを背中合わせに配置して両者を金属製の頑丈な支柱で連結するというものです。それぞれのウーファーの反作用力はもう一方のドライバーの反作用力で打ち打ち消し合うために、ウーファーが動くことによる反作用力がキャビネットに影響を与えることはありません。この優れた方式のために、キャビネットを軽量の樹脂で造ることが可能になり、また樹脂製のキャビネットだからこそアブソーパー・チューブのような曲面構成のキャビネットが実現できたのです。



WBT 製 バイワイヤリング対応スピーカー端子

GIYA Cuシリーズでは、スピーカー端子をリア面に配置しました。リア面に配置することで、ケーブルの取り回しが楽に、また安定した設置を実現し、設置自由度が向上します。

スピーカー端子はスベード端子もしくはバナナ端子で接続可能です。シングルワイヤ用にジャンパー線を付属していますが、バイワイヤリングで接続されることをお奨めいたします。High 用スピーカー端子は、ツイーター/ミッドレンジ/ミッドベースにつながり、Low 用スピーカー端子はウーファーにつながります。もしシングルワイヤリングで接続される場合は、スピーカーケーブルを High 側に接続し、付属ジャンパー線を使用して Low 側を接続してください。

スパイクによる6点支持

すべてのGIYAシリーズは、付属のスパイクを使用することを前提にしています。一本あたり6個のスパイクで支持され安定感は抜群です。



クロスオーバー回路を独立化 (G1 Spirit-CuEX / G2-CuEX / G3-S2EX/G4-CuEX)

スピーカーキャビネットの内部はドライバーの振幅による振動に常にさらされており、また、ドライバーユニットが近接に存在することによる磁束の影響も見逃せません。クロスオーバー回路をスピーカー外部に設置することにより振動と磁束の影響から逃れ、従来以上に透明でクリアなサウンドを実現いたします。



GIYA G2 - Cu/ G2-CuEX

新時代 GIYA Cu シリーズの中核をなすモデル

オリジナル G1、および G1 SPIRIT Cu の進化形として誕生した GIYA G2 Cu は、卓越したテクノロジーと比類のない音質を受け継いでいます。G2 Cu は、上位機種 G1 SPIRIT Cu と共通の設計思想に基づくキャビネットを採用。その独創的な形状は、共振や内部反射を徹底的に抑制し、音楽信号の純度を高めるために最適化されています。ドライバー構成も同様に、すべてのユニットが独立した指数型チューブにより最適な負荷を受けています。

高域は合金/カーボン製ドームを採用した D26 ツイーターが担当し、低域は C175 が受け持ちます。中域には、銅キャップ付き磁気回路を備えた D50Cu (アッパーミッド) および C125SCu (ローミッド) を採用。これにより、中域再生において極めて高い純度と低歪を実現しています。その結果、得られるサウンドは極めて自然で透明感に富み、音楽の細部までも忠実に描写。高い解像度と豊かな音楽性を両立した再生を可能にします。

■スペック

ドライバーユニット	D26 Tweeter D50 Cu Mid-Range C125 SCu Mid-Bass C175 Woofer x 2
能率	89dB @ 2.83V rms / 1m
インピーダンス	6Ω nominal / 4Ω minimum
周波数帯域	29 - 36,000 Hz @ -6dB
ツイーターブレイクアップ周波数	44,000 Hz
周波数特性	33Hz~33kHz (基準値±2dB)
全高調波歪率 (2次・3次)	<0.5% below 220Hz, <0.1% between 220Hz and 3.5kHz, <0.3% above 3.5kHz
クロスオーバー周波数	220 / 880 / 3,500 Hz
最大許容入力	800 W
製品寸法・重量	1,383(H) x 360(W) x 638(D)mm, 55kg/43kg(EXモデル)



GIYA G3 - Cu/ G3-CuEX

最高パフォーマンスのベストセラーモデル

上位モデルで培われたモーター構造とサスペンション設計を継承し、コンパクトなキャビネットながらも力強い低域エネルギーを実現するのが GIYA G3 Cu です。バスエンクロージャー上部には、Vivid Audio 独自のテーパード・チューブ・アブソーバーに由来する特徴的なカール形状を採用し、縦方向の共振を徹底的に排除。明確で俊敏な低域再生を実現します。高域および中域には上位モデルと同一の D26、D50Cu、C125SCu ドライバーを搭載。低域には 2 基の C135 ユニットを採用し、リアクションキャンセル構造によってエンクロージャーの振動を相殺しています。これにより、不要な揺れや濁りのない、立体的で明瞭な音像を再現します。

■スペック

ドライバーユニット	D26 Tweeter D50 Cu Mid-Range C125 SCu Mid-Bass C135 Woofer x 2
能率	87dB @ 2.83V rms / 1m
インピーダンス	6Ω nominal / 4Ω minimum
周波数帯域	33 - 36,000 Hz @ -6dB
ツイーターブレイクアップ周波数	44,000 Hz
周波数特性	36Hz~33kHz (基準値±2dB)
全高調波歪率 (2次・3次)	<0.5% below 220Hz, <0.1% between 220Hz and 3.5kHz, <0.3% above 3.5kHz
クロスオーバー周波数	220 / 880 / 3,500 Hz
最大許容入力	800 W
製品寸法・重量	1,161(H) x 341(W) x 578(D)mm, 42kg/ 37kg(EXモデル)



GIYA G4 - Cu/ G4-CuEX

小さなスペースでも本物のGIYAサウンド

コンパクトなサイズながら、GIYA G4 Cu は真の 4 ウェイ構成を備えています。5 基のドライバーはいずれも自社開発・製造によるもので、それぞれ独立したテーパード・チューブ・アブソーバーによって最適にロードされています。高域には上位モデルと同一の D26 ツイーターを搭載し、滑らかに伸びやかな高域再生を実現。低域には大振幅に対応するよう特別設計された C125L バスドライバーを 2 基採用し、キャビネット容量を超える豊かな低域表現を可能にしています。中域には D50Cu を、ローミッドにはより小型の C100SCu を搭載。いずれも銅キャップ付き磁気回路を採用し、高域特性の拡張と歪みの低減を実現しています。

G4 Cu は上位 GIYA モデルと同様、極めて制動の効いた明瞭な低域を再生。不要な共振や濁りを徹底して排除し、自然で疲労感のないリスニング体験を提供します。

■スペック

ドライバーユニット	D26 Tweeter D50 Cu Mid-Range C100 SCu Mid-Bass C125L Woofer x 2
能率	86dB @ 2.83V rms / 1m
インピーダンス	6Ω nominal / 4Ω minimum
周波数帯域	36 - 36,000 Hz @ -6dB
ツイーターブレイクアップ周波数	44,000 Hz
周波数特性	39Hz~33kHz (基準値±2dB)
全高調波歪率 (2次・3次)	<0.5% below 220Hz, <0.1% between 220Hz and 3.5kHz, <0.3% above 3.5kHz
クロスオーバー周波数	250 / 1,000 / 3,500 Hz
最大許容入力	400 W
製品寸法・重量	1,011(H) x 300(W) x 460(D)mm, 24.5kg / 21kg(EXモデル)



カラーバリエーション

すべての GIYA シリーズの仕上げは、自動車と同じ塗装工程により外観仕上げを行います。各モデルにはスタンダードカラーが設定されていますが、オプションでアップグレードカラーを選択いただくことも可能です。また、特別色をオーダーも可能です。販売店にご相談ください。

【スタンドカラー】

オイスターマットグレー/ パールホワイト/ ピアノブラック

【アップグレードカラー】

フェラーリエロー/ ボローロレッド/ ライクスムゼウムブルー/
モナークパープル/ シリオブルー

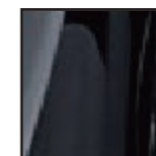
※標準は光沢仕上げですが、全てのカラーでマット(ツヤ消し)仕上げも選択できます。



オイスターマットグレー
スタンダードカラー



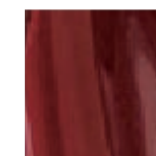
パールホワイト
スタンダードカラー



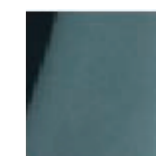
ピアノブラック
スタンダードカラー



フェラーリエロー
アップグレードカラー



ボローロレッド
アップグレードカラー



ライクスムゼウムブルー
アップグレードカラー



モナークパープル
アップグレードカラー



シリオブルー
アップグレードカラー